琉球大学学術リポジトリ

各種報告

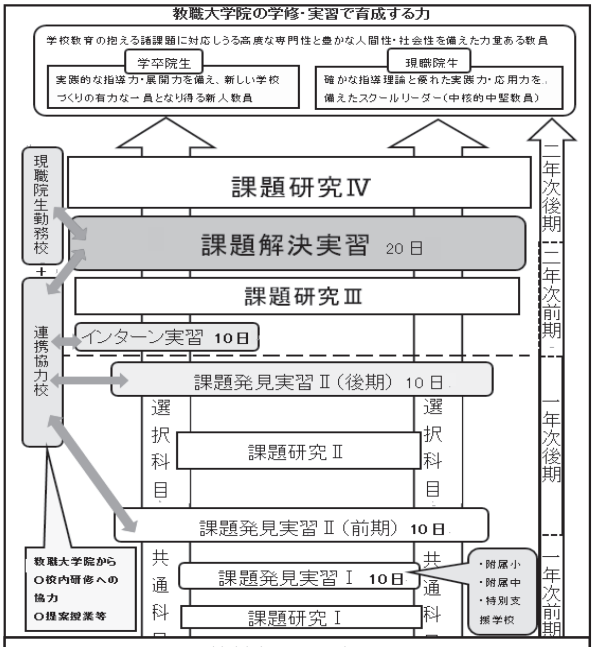
メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017995

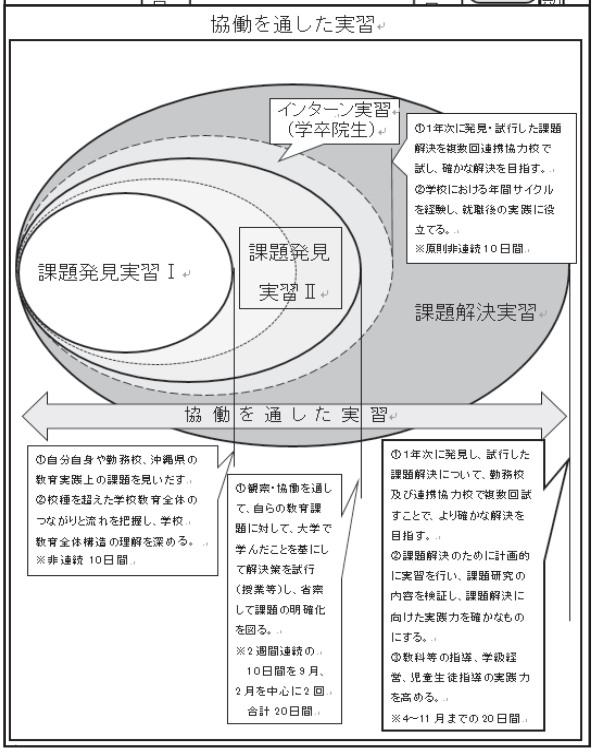
各種報告

実習の成果と課題

―協働を通した実習とコロナ禍―

琉球大学教職大学院　実習委員会





１．共通・選択科目及び課題研究Ⅰ～Ⅳとの融合

１年次の課題発見実習Ⅰ・ⅠA/ⅠBは，共通科目，課題研究Ⅰと並行して非連続の実習に取り組む。共通科目での学びと実習での学びが課題研究Ⅰ・ⅠA/ⅠBを中心に統合される。課題発見実習Ⅱでは，後期の選択科目の学びが実習で実践できるよう課題研究とのつながりも強くなった。

２年次は１年次で検討された研究課題を基に課題解決実習と課題研究Ⅲ・Ⅳに取り組んだ。課題解決実習を行う院生の勤務校及び連携協力校でのリフレクションに加えて，課題研究Ⅲ・Ⅳで，課題解決実習で多様な大学教員を交えて省察し，課題への解を具体化する等の学修を重ねた。

２．連携協力校との協働の充実

近年，小学校の現職院生が増え，協力校１校あたりの実習生が多くなった。そこで，今年度から宜野湾市立志真志小学校が新たに連携協力校になった。また，高等学校（普通科）も２校と少なく，協力校に負担が生じた為，宜野湾高等学校を連携協力校として追加した。

課題発見実習Ⅱの９月実習では，コロナ感染拡大の時期と重なり，計画通りの授業ができなかった実習生も多々いた。協力校では児童生徒や教職員が自宅待機となるケースもあった。自宅待機の教員の代わりに実習生が授業を行ったり，リモート授業のアシスタントを実習生が勤めたりした。コロナ禍の学校現場で，手薄になった部分を実習生が補い，連携協力校の職員からも評価された。

３．コロナ禍で

今年度もコロナにより，大学からの実習校への大人数での訪問を避け，訪問回数，授業参観人数を減らす予定であった。しかし，ほとんどの協力校からそのような実施をすることは無いと回答があり，実習に係る活動を大きく減らすことはなかった。実習生には体調チェックとその記録を採り，マスク着用，ソーシャルディスタンスを義務付けた。

年間を通して，協力校の休校，非常事態宣言発令もあり，実習の日程調整に追われた。昨年度の経験を踏まえ，協力校との調整はある程度スムーズに行えたと思われるが，協力校の状態に応じた個別の対応が大学院側に求められる。特に，特別支援学校への配慮は必要と考える。

ＦＤ委員会

ＦＤ委員会は，今年度，委員会を延べ５回開催し，①相互授業参観，②学生による授業評価，③学生アンケートの実施，以上の３点を中心に活動を行った。
＊ＦＤ委員：金城満，藏滿逸司，田中洋。

１．相互授業参観・授業公開

毎年前期後期の各２週間，教員が相互に授業を参観し，その結果を授業改善に活かすとともに，広く授業を公開することにより，本専攻の教育活動の周知とその改善に努めている。しかし、本年度は，新型コロナ感染拡大防止のため、昨年度と同様、前学期は中止、後学期は専攻内での授業参観のみを実施した。日程は、2021 年 12 月６日（月）～17 日（金）の 10 日間であり、参観者は延べ 16 名であった。昨年度の参観者数（後学期のみ延べ 20 名）には及ばなかったが、専攻に所属する専任教員数とほぼ同数であり、最低１人１回の参観が定着してきていることがうかがえる。

アンケートには，参観者がほぼ全員回答しており、その内容は、詳細かつ具体的な記述となっているものが多い。そのほとんどは好意的なコメントであるが、それゆえ授業者からは授業改善への視点を求める声もあった。

２．学生による授業評価

（１）授業評価の項目や方法

教育学部では教育活動に係る全学的な授業の点検評価に関して，教師が持つ教育力の自己点検と自律的な向上を目指して 2006 年度から「授業評価アンケート」を導入しているが，それと同様に教職大学院教員も 2016 年度からこの「授業評価アンケート」に参加している。この「授業評価アンケート」は，共通項目からなる授業改善のための５つの観点（①シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった②使用した教材は適切であった③教員の説明はわかりやすかった④理解を促すための方法上の工夫がよくされていた⑤総合的に判断してこの授業に満足している）で構成されており，そのうえで授業者が新たに聞きたい項目を独自に構成できるようになっている。それについて受講学生・院生は５つの観点（１全くそう思わない２そう思わない３どちらとも言えない４そう思う５強くそう思う）で回答している。教職大学院では，この「授業評価アンケート」の結果を受けて、各授業担当者が今年度の総括ならびに次年度の改善点などについて考察する「リフレクションシート」を作成している。

（２） 実態

次表が 2020 年度後期授業ならびに 2021 年度前期授業の共通質問項目の平均点となっている。ほとんどの授業において平均が４から５で推移しているが，前期科目「特別支援教育特論」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅲ」の一部項目で４を下回る評価があるなど，授業の改善にむけて努力が必要とされる結果となった。自由記述欄には「実践をくわしく紹介していただき、実践していくうえでの大きな気付きがありました。また、最終課題の計画作りでは、課題研との関連を考えながら、次年度、そのまま使えるものになり、他の方の発表から取り入れたいものも多くあり、とてもよかったです。すてきな講義ありがとうございました。」（積極的生活指導・生徒指導）「変化の多い特別支援教育の基礎的なことを学ぶことができて、とてもよかった。」（特別支援教育の教育課程・授業特論演習）などのように講義内容を高く評価するものが多かった。一方、授業形態に工夫が欲しい、グループのメンバー編成が固定化しないようにして欲しい、授業の案内を早めにして欲しい、講義を時間通りに終わって欲しいなどさまざまな指摘があった。記述された内容を精査し今後の授業改善に役立てたい。

2020 年度後期：授業科目名	人数	1	2	3	4	5
積極的生活指導・生徒指導	11	4.6	4.7	4.8	4.6	4.7
授業づくりの理論と実践	4	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8
特別な支援を必要とする子どもの理解と実践	11	4.9	4.7	4.7	4.8	5
いじめ問題への対応と課題	7	4.9	4.7	4.9	4.9	4.9
教師の成長とメンタリング	2	4	4	5	5	5
特別支援教育の教育課程・授業特論演習	5	5	5	5	5	5
特別支援教育コーディネーター論	6	5	5	5	5	5
病弱児の理解と支援の模索	3	5	5	5	5	5
障害児理解と教育実践・発達臨床支援	5	4.8	5	5	5	4.8
特別支援教育・地域支援の理論と実践	3	3.3	4.3	4.3	4.7	4.3
子ども支援のための地域・保護者との協力関係づくり	9	4.9	4.9	5	4.8	4.9
活用力としての教科外活動	3	4.3	4.7	4.3	4.3	4.7
学習指導のための教材・教具の開発と活用	10	4.7	4.8	4.9	4.8	4.7
言語活動と協同学習	6	5	5	4.8	5	4.8
課題研究Ⅱ課題研究Ⅱ（特別支援教育）	19	4.5	4.4	4.5	4.5	4.5
授業分析・リフレクションの理論と実践	5	4.8	4.8	4.8	4.6	4.8
校内研究組織の実践と課題	4	5	5	5	5	5

2021 年度前期：授業科目名	人数	1	2	3	4	5
教育課程編成の課題と実践	20	4.5	4.6	4.5	4.6	4.6
指導と評価の課題と実践	20	4.9	4.8	4.8	4.8	4.9
教授・学習の課題と実践	21	4.9	4.9	4.7	4.7	4.8
思考・判断・表現力育成の課題と実践	21	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9
生活指導・生徒指導の実践と課題	21	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9
学校不適応への実践と課題	20	4.8	4.6	4.6	4.6	4.7
学級経営の実践と課題	20	5	4.8	4.8	4.9	5
学校改革の実践と課題	21	4.8	4.8	4.6	4.6	4.8
学校教育・教員のあり方の課題と実践	21	4.7	4.5	4.4	4.6	4.8
沖縄の学校と社会	21	4.9	4.8	4.7	4.7	4.9
特別支援教育特論	12	3.9	3.8	3.8	4	3.9
課題研究Ⅰ	21	4.1	3.7	3.9	4	3.9
課題研究Ⅲ	17	4.1	3.9	4.2	4.1	4.1
特別支援システム論	5	5	5	5	5	5

３．学習成果把握のための教職大学院生を対象としたアンケート調査

本教職大学院では，学習成果、効果を把握する１つの手立てとして，学生に対して定期的に教職や教職大学院に対する意識調査（５件法：「とてもよくあてはまる」～「まったくあてはまらない」）を行い（41 項目），集団の変容を分析している。その調査時期は，基本的に入学直後（事前調査）と２年次の修了直前である。昨年度（2021 年 3 月）に修了した４期生の結果について概観してみたい。

本専攻の教育目的「学習指導力」「生活指導力」「組織運営力」の向上と照らし合わせながら学習成果をみると、次のような顕著な傾向が見て取れる。第１に「学習指導力」については、「専門教科（主に中・高）あるいは最も興味のある分野の力量認知（主に小）」に対する質問に、「力量を有している」と回答した者が、11.2%から 41.2%へ約４倍近くに増加している。また、「教材についてその背景まで論理的に理解できる」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が、11.1%から 53%に増えて過半数を超えた。さらに、「学習指導に関して自信をもっている」という質問に対しても、「あてはまる」と回答した者が、5.6%から 47.1%に大幅に増加している。

第２に「生活指導力」については、「子ども理解にすぐれている」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が、44.4%から 76.5%へ上昇し、７割以上が肯定的な自己評価をしている。また、「生徒指導に関して、個や集団を指導するための手立てを理解している」という質問に対しては、38.9%から 82.3%に増加しており、実に８割以上の学生が肯定的に答えている。

さらに、第３の「組織運営力」についても、「異なる意見・立場を尊重し、職務にあたっている」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が、61.1%から 82.3%へと着実に向上している。

以上を踏まえたうえで、最後に専攻の教育目的から改めて結果を見てみたい。本専攻は、「学習指導場面、生徒指導場面、組織運営場面を通じて合理的かつ反省的に考えて問題解決ができる人材を育成すること」を教育目的としている。この目的に対する学習成果・効果としては、まず、「高い専門性を有している」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が、11.2%から 23.5%へほぼ倍増していることが重要である。また、「さまざまな課題に対して、適切に対応することができる」及び「さまざまな課題に対して臨機応変に対応することができる」というそれぞれの質問に対して「あてはまる」と回答した者が、前者は 27.8%から 58.8%へ２倍以上に増加しており、後者も 50%から 70.6%へと着実に増えている。さらに、「自らの課題を見出し、自己成長のため努力している」という質問に対して肯定的に答えた学生は、83.4%から 88.2%に微増しており、自己成長への高い意識が継続、さらには向上していることがうかがえる。

これらの結果は、大学院生の主観的評価であることを十分に認識しつつも、本専攻の教育目的が、一定程度達成されているといってよいであろう。

４．その他

昨年に引き続き、コロナ禍の状況にあるため、多人数が一同に会するようなＦＤの機会は控えざるを得なかった。しかし、そのような状況であるからこそ利用する機会が増えた IT ツールについて、学生も含めて学習する機会を機動的に設け、それをＦＤ活動と兼ねることにした。具体的には、「ロイロノート」について３回、「Google Classroom」について２回、「Microsoft Teams」について５回、合計 10 回の学習会を実施し、参加者は延べ 50 名であった。

また、2021 年 12 月 23 日（木）に、教員養成評価機構がオンラインで開催した「教職大学院認証評価実施説明会」を、教職員のＦＤ研修として文系総合研究棟 305 教室で実施した。当日は 10 名が参加し、本学の次回認証評価受審が 2023 年度に予定されるところ、その準備として、認証評価の概要について理解するよい機会となった。

考えを深め，英語で表現する力を育成する授業づくりの研究
―CLIL（内容言語統合型学習）の活用を通して―

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻　２年
漢那　有希子（宮古島市立下地中学校教諭）

１．テーマ設定理由

これまでの授業実践において，学習している内容や言語材料への関心と理解を深め，それらを活用して思考・判断・表現を促すような言語活動が課題であった。その改善策として CLIL に着目し，豊かな言語活動を通して，考えを深め，英語で表現する力を育むことを目指す必要性から本テーマを設定した。

２．研究の目的

中学校において CLIL を活用した授業づくりを行うことで，考えを深め，英語で表現する力を高める効果と有効性について検討することを目的とする。

３．研究内容

本研究では，英語で表現する力を，「学習するテーマについての情報や自分の考えを，既習の語彙や文法を活用し，相手に伝わるような英語で書いたり話したりすること」と定義し，CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）の４Ｃである「Content（内容）」「Communication（言語）」「Cognition（思考）」「Community または Culture（協学）」を有機的に統合した授業の構成と具体的な活動を考案する。

４．研究方法

生徒の実態を踏まえ，CLIL を活用した授業づくりを行い，IC レコーダーやビデオカメラで記録した生徒の発言やワークシート，ふり返りシートの記述，質問紙等を分析し，その効果と有効性について考察する。

５．研究の実際

（１）対象と期間

沖縄県内の公立 A 中学校３学年生徒 28 名（男子 15 名，女子 13 名）を対象に，2021 年９月から約１ヶ月間にわたって集中的に検証授業を行った。

（２）授業計画

”AI Technology and Language”という AI（人工知能）の進化と，それに伴う言語学習の意義や必要性について様々な意見があることが示される単元を扱った。学習内容と言語に関する指導目標と授業の設計図（表１）を作成し，４C の観点から内容や活動の具体化を

試みた。考えを深める手立てとして単元の題材に関する発展的な学習を設け，住んでいる地域の良さを生かしたり課題を解決したりするために効果的な AI の活用法についてグループで考え，発表する活動を行った。生徒の会話やワークシートの記述から，互いの持っている知識を活用し，考えを表現につなげている様子が把握できた。授業後の感想には，内容面や発表に関する記述が多く，社会的な話題をより身近で現実的なものとして捉え，活動を通して達成感を感じていることが分かった。

表１ Unit4 の目標と授業の設計図

【内容】①発展する科学技術と共存する際の利点と問題点について理解する。
②自分の住む地域や身のまわりの課題とその解決策を，AIとの共存の視点で考える。
【言語】関係代名詞（主格）の表現を用いて，自分の意見を伝えることができる。

Content	Communication	Cognition	Culture/Community
（宣言的知識） AIの進化や言語学習の必要性の是非について知る	（言語知識） 【語彙】AIや言語について 【表現】関係代名詞主格 （which, who, that）	（低次思考力） remembering（記憶） understanding（理解） applying（応用）	（協同学習） ペア活動 グループ活動
（手続的知識） 課題に対するAIの効果的な活用について考える	（言語技能） 読む・聞く・話す・書く	（高次思考力） analyzing（分析） evaluating（評価） creating（創造）	（国際意識） 地域課題の理解 SDGsへの意識

６．結果と考察

（１）質問紙調査について

事前事後で質問紙調査を実施し，思考と表現について問う共通項目について，平均値と標準偏差を算出するとともに対応のある t 検定を行った結果，すべての項目において５％水準で統計的有意差が認められ，効果量はいずれも中もしくは大程度であった。また，事後のみ聞いた項目では,考えの深まりについてほぼ全員が肯定的に回答し,「英語で話す力」「英語で書く力」について高まりを感じた生徒はどちらも７割以上であった。学習効果についての項目では，ふり返りの場面に行った「１日１文」やペア・グループ活動，思考ツールを用いて考えを整理する活動について９割以上が肯定的に捉えていた。

（２）事前・事後で行ったライティングについて

最初の授業と事後で，”Do you think AI makes people happy?” という問いに対する各自の考えを,何も見ずに５分間で記述した英文について,表現力の観点から考察を行った。英語が得意な生徒と苦手意識を持つ抽出生徒６名の回答は，学習内容を生かして理由や具体例を交えて表現する様子や相手に伝わりやすい構成になるなど，いずれも英文の量や質に変化が見られた。他の生徒の英文にも全体的に文法や語彙の正確さにまだ課題は見られるが,記述量の増加やその内容からは考えを表現しようとする意欲の高まりが感じられた。

７．成果と課題

生徒の活動の様子や質問紙の結果から，各自の持つ知識や情報を伝え合い，そこから新たなアイディアを生み出し，英語による表現へとつなげていることが分かった。協同学習や発表で互いの考えを伝え合う場面を通して考えの深まりを感じていることも確認できた。表現力に関して，書くことについては，事前事後で行ったライティングの結果から，正確さに課題は残るものの，既習の語句や表現を用いて考えを伝えようとする意欲の高まりと主体性が見られ，CLIL を活用した授業に一定の効果が感じられた。一方で，生徒の日本語使用が多かったという点から認知的負荷を考慮した教材研究を行う必要性を強く感じた。生徒の実態に応じて，内容に関する認知レベルと言語レベルについて留意すべきである。

年間行事　２０２１（令和３）年度

４月５日オリエンテーション

４月６日入学式

６月４日～課題発見実習Ⅰ、ⅠB

Ⅰ：附属小学校（６月４日、６月２４日、６月２５日）、附属中学校（４月２３日、５月７日、７月２日、７月７日）、沖縄盲学校（５月１４日、１０月１１日、１０月１３日）沖縄ろう学校（１０月１１日　１０月１４日、１０月１５日）、森川特別支援学校（１０月１２日）、泡瀬特別支援学校（５月２１日）、美咲特別支援学校（７月１４日）

ⅠB：沖縄盲学校（５月１４日、１０月２０日、１０月２７日）、沖縄ろう学校（１０月３１日、１１月１７日、１１月２４日）、鏡が丘特別支援学校（６月２１日、６月２２日、７月１日、７月２日）

７月１１日　オープンキャンパス、Zoomで実施　申込者２６名　　参加者１９名

８月３０日～課題発見習Ⅱ

前期：大山小学校宜野湾中学校（８月３０日～９月１０日）西原高校（８月３１日～９月１３日）、中城南小学校、普天間中学校（９月１日～９月１４日）普天間第二小学校）、志真志小学校、美東中学校、中部商業（９月６日～９月１７日）、島尻特別支援学校（１０月４日～１０月１５日）

後期：中城南小学校、はなさき支援学校（１月２４日～２月４日）、普天間第二小学校、大山小学校、志真志小学校、普天間中学校、宜野湾中学校、宜野湾高校（１月３１日～２月１４日）、美東中学校、西原高校（２月７日～２月２１日）

１０月２日　教育実践・研究交流集会〔ホームカミングデー〕Zoomで実施　参加者４６名

１０月１６日　教職大学院入学考査試験

１１月４日　教職大学院 合格発表

１２月１日～１２月１４日　授業相互参観

１２月４日～６日　日本教職大学院協会研究大会　発表者　漢那　有希子院生

１月１８日　第２回教職大学院連携推進会議開催（第１回は５月下旬に書面開催）

１月２２日　教職大学院入学考査試験（二次募集）

２月８日　第３回連携協力校等連絡協議会（第１回は５月下旬に書面開催、第２回は１０月２１日にオンライン開催）

２月１０日　教職大学院合格発表（二次募集）

３月６日　第６回学修成果発表会（学外向け）Zoomで実施

2021 年度　実習連携協力校一覧

校種	学　校　名	住　　所
小学校	琉球大学教育学部附属小学校	西原町字千原 1 番地
	中城村立　中城南中学校	中城村字南上原 800
	宜野湾市立　大謝名小学校	宜野湾市大謝名 5-12-1
	宜野湾市立　普天間第二小学校	宜野湾市新城 2-8-19
	宜野湾市立　志真志小学校	宜野湾市宜野湾 3-5-1
	宜野湾市立　大山小学校	宜野湾市大山 5-16-1
中学校	琉球大学教育学部附属中学校	西原町字千原 1 番地
	沖縄市立　美東中学校	沖縄市高原 5-12-1
	宜野湾市立　普天間中学校	宜野湾市新城 2-41-1
	宜野湾市立　宜野湾中学校	宜野湾市赤道 1-15-1
高等学校	県立　普天間高等学校	宜野湾市普天間 1-24-1
	県立　宜野湾高等学校	宜野湾市真志喜 2-25-1
	県立　西原高等学校	西原町字翁長 610
	県立　中部商業高等学校	宜野湾市我如古 2-2-1
	県立　浦添商業高等学校	浦添市伊祖 3-11-1
特別支援学校	県立　大平特別支援学校	浦添市大平 1-27-1
	県立　美咲特別支援学校	沖縄市美里 4-18-1
	県立　美咲特別支援学校はなさき分校	北中城村字屋宜原 415
	県立　島尻特別支援学校	八重瀬町字友寄 160
	県立　鏡が丘特別支援学校	浦添市当山 3-2-7
	県立　森川特別支援学校	西原町森川 151
	県立　泡瀬特別支援学校	沖縄市比屋根 5-2-20
	県立　沖縄盲学校	南風原町字兼城 473
	県立　沖縄ろう学校	北中城村字屋宜原 415

令和3（2021）年度　高度教職実践専攻会議構成員以外の授業科目担当一覧

1.　選択科目

科目名	履修学生	担当教員	備考
授業づくりと指導法の高度化	218258B　玉城　貴子 218268J　呉屋　美穂	教育学部　学校教育講座 教授　上地　完治	
	218259K　下地　昌代	教育学部　家政教育講座 講師　宮城　利佳子	
	218261B　網敷　藤代	教育学部　学校教育講座 講師　田場　あゆみ	
国語科教育の理論と実践の高度化Ⅰ 国語科教育の理論と実践の高度化Ⅱ	218269G　長元　智	教育学部　国語教育講座 講師　高瀬　裕人	
	218270A　當間　比呂	教育学部　国語教育講座 教授　萩野　敦子	
	218275B　諸喜田　峰子	教育学部　国語教育講座 教授　村上　呂里	
国語科教育の理論と実践の高度化Ⅰ	218276K　名冨　綾乃	教育学部　国語教育講座 教授　中本　謙 教授　辻　雄二	共同
国語科教育の理論と実践の高度化Ⅱ		教育学部　国語教育講座 教授　村上　呂里 講師　高瀬　裕人	共同
理科教育の理論と実践の高度化Ⅰ 理科教育の理論と実践の高度化Ⅱ	218256E　砂川　誠智	教育学部　理科教育講座 教授　濱田　栄作	
	218274C　伊佐　勇亮	教育学部　理科教育講座 教授　柄木　良友 教授　岩切　宏友 講師　城間　吉貴	共同
音楽科教育の理論と実践の高度化Ⅰ 音楽科教育の理論と実践の高度化Ⅱ	218271J　宮里　未希	教育学部　音楽教育講座 教授　小川　由美	
英語科教育の理論と実践の高度化Ⅰ	218263H　仲松　夕里菜	教育学部　英語教育講座 教授　與儀　峰奈子	
英語科教育の理論と実践の高度化Ⅱ		教育学部　英語教育講座 准教授　深澤　真	
特別支援教育の教育課程・授業特論演習	218265D　橋本　剛	教育学部　特別支援教育講座 准教授　權　偕珍	教職実践講座 教授　吉田　安規良 准教授　城間　園子 と共同

※非常勤講師を除く琉球大学の専任教員のみ掲載

2.　必修科目

科目名	履修学生	担当教員	備考
課題研究Ⅱ 課題発見実習Ⅱ	218256E　砂川　誠智	教育学部　理科教育講座 教授　濱田　栄作	
	218258B　玉城　貴子 218268J　呉屋　美穂	教育学部　学校教育講座 教授　上地　完治	
	218269G　長元　智	教育学部　国語教育講座 講師　高瀬　裕人	
	218270A　當間　比呂	教育学部　国語教育講座 教授　萩野　敦子	
	218271J　宮里　未希	教育学部　音楽教育講座 教授　小川　由美	
	218275B　諸喜田　峰子 218276K　名冨　綾乃	教育学部　国語教育講座 教授　村上　呂里	
課題研究Ⅲ 課題研究Ⅳ 課題解決実習	208261G　豊田　花恵	農学部　亜熱帯生物資源科学科 健康栄養科学分野 准教授　井口　直子 准教授　宮城　一菜	教職実践講座 教授　吉田　安規良 と共同

※非常勤講師を除く琉球大学の専任教員のみ掲載

令和３年度実習指導一覧

本教職大学院においては，学習指導場面，生徒指導場面，組織運営場面という沖縄県の課題に関わる各場面において合理的かつ反省的に考えて問題解決ができる人材を育成することを目的の一つとしている。そのため，「課題発見実習Ⅰ/IA/IB・Ⅱ」と「課題解決実習」における実習参観及びリフレクション並びに実習校との事前調整等のため，学校訪問を行っている。

なお，学校訪問の回数は次のとおりである。

氏　名	回数	備　考
道田　泰司	22	
杉尾　幸司	6	専攻長
田中　洋	16	
吉田　安規良	22	
上間　陽子	12	
丹野　清彦	31	
下地　敏洋	12	
浦崎　武	9	
白尾　裕志	15	
金城　満	5	
藏滿　逸司	16	
村末　勇介	12	
比嘉　俊	22	
城間　園子	53	
多和田　実	16	
上原　正人	27	人事交流
與那嶺　律子	23	人事交流
小川　由美	4	教育学部所属
高瀬　裕人	1	教育学部所属
井口　直子	1	農学部所属
宮城　一菜	1	農学部所属
合　計	326	

（令和４年２月２８日　現在）